

毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵税共五十錢)



二 圭 田 須 兼 編
市 田 上 縣 野 長 人 行 發
校 學 門 專 絲 蠶 田 上 所 行 發
會 町 縣 南 市 野 長 所 副 印
社 會 式 株 關 新 日 報 信 所 副 印

開港拾遺集(三)

横濱 正本章三

◇相摸取活動の事

一、廿六日(嘉永七年二月廿六日)

×××公儀より被下物時給の長持九棹に入来る外に、四斗八升入米二百俵被遺候。右之米應接場脇に積有、之を相摸取大勢に而搬び渡し候。尤一人に而二俵宛擔持つ。

右の俵異人下官の者大勢に而、一俵を二人三人宛に而、小船へ積入申候。異人一人足を踏損し俵と共に海中へ轉落し、水底に沈み良久して這出候。右之通取被遺候間村方人足手傳、積入遺し候。俵渡し相濟其後右の相摸取土俵の曲持地取稽古仕御役人に御覽入候。異人も見物す。×××

右の文は前述の日記中のもので、この日は三度目の應接の行はれた日です。

この相摸取の繪は開港に關する書物を見ると面白い圖入りで載せてあるのを見る。

異人が米俵を擔ひて海中に落ち込む等は随分滑稽であつた事と思はれます。

尙この日、この應接場の裏畑の中に棧鋪を懸けて、ペルリよりの贈物の蒸氣小火輪車を運轉して之を見物したとの事であります。

又この日應接の有様を内緒で見て來た村人が左の様にその感想を語つて居ます。

實に長生きいたし面白き事を見物仕候。

先最初は唐人師、力士俵の曲持、相摸取取稽古、黒坊の水稽、海底の刀持、龍吐水の水機關、徳利の綱渡り、火の車の離業等緩々拜見仕候。中々兩國山下淺草杯にても斯様の珍らしき見物は無御座候——と申したとて皆で大笑ひしたと書いてあります。

◇松平藩士見聞書抄

之の見聞書はペルリ第一回來航の折のもので彼等の外貌に對する觀察が詳細に記されて居ます。

一、夷人ども皆丈長く候處首と足は存外小ぶりにて不釣合に之有特に足は鳥獸に似候様に人畜の間と申さん尤に有之、其上眼は皆薄曇り茶色にて此方にて近眼と申ものゝ如く、鶏の眼のかすみ候やうに有之候。肌膚も鳥の羽をむしり候跡の如く傍を通行候ては犬の

山本三六郎著

化學純絹絲の工業的完成

伊太利蠶絲絹業の現況
原因と其の改良

蠶絲業法規要論

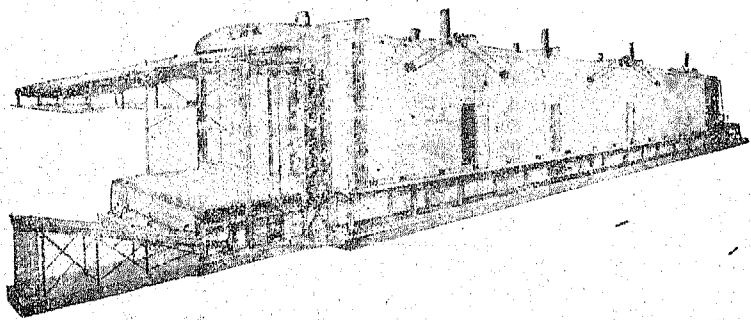
市田上縣野長 所行發
會究研學科絲蠶 (振替長野6413番)

◇サムライ使節の事

先頃朝日新聞紙上に——

「サムライ使節」の貴重な米日誌米國八氏から寄贈さる——と、安政六年十一月ニニューヨークにて市長と會見の繪入新聞の寫眞が出て居ましたのを御存じの事と思ひます。

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



1933年代表型

【複製贈呈】

製作發賣元

株式會社

大和三光商會

東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目

特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機
特許大和式自動輸送乾燥機

mastered English enough to say
very distinctly as he departed
"want to go home"

註 堀辰之助氏は外國語を會得するに良い才能を持つて居た。彼氏は出發に際し次の如く言へる程英語力があつた。

「家へ歸へりたい。」
つまり堀氏の英語は達者ではあつたが、その主格の「私」を忘れて居るのを皮肉つたものと思はれます。
然し私は日本の外交に當つて最も偉大なる事業を爲し遂げた堀氏等始

め数名の通詞に對して、敬意を表する次第であります。

堀氏等が如何に苦心して勉強したかを憶ふ時、逸早く英語研究に着手し得たその博學に對して先覺者としての尊敬も湧いて來ます。(續)

紅藍洞染織漫筆

桐生 星田 馨

我國に於ける蠶の起源

本邦養蠶の業は遠く太古に起つてゐる。而して其起源に二説がある。

一、日本書記に現はれたる蠶の神話

天照大神が既に高ケ原を統治せられ日夜見尊が大神を助けて天上を治められた後の或る日のことであつた。大神は日夜見尊に勅して宜はく「葦原の中國に保食神ありと聞く、汝行きて見給へ」

と、保食神とは食物を掌る神で、伊弉諾尊が飢え給へる時に生れられたる御方食稻魂尊のことである。即ち大神は此の神に依つて農耕の業を進めんと思召したのである。

日夜見尊は勅を受けて保食神の許に行かれた。保食神は首を廻らして陸に向はれると口から飯が出て、海に向はれると大小の魚が出て、山に向はれると亦鬼、猪、鹿の類が出た。かくして出た數々の品を料理し机の上に並べて尊を饗應せられたのである。尊はこれを見て大いに怒り給ひ「穢はしきかな、鄙しきかな、如何んぞ口より吐きたるもの我に奉るや」

とて劍を抜いて保食神を打殺し、具さに復命せられたのである。大神は

これを聞いて怒り給ふこと甚しく、「汝は惡神なり、相見るべからず」と仰せになり日夜見尊と晝夜を分ちて住み給ふたのである。かくて、大神は天熊人を遣して見せ給ふた處、保食神は既に死んで其神の頭は化して牛馬となり、額の上には粟を生じ肩の上には蠶湧き、眼の中には稗を生じ、腹の上には稻を生じたのである。天熊人は悉く之等を持ち歸つて大神に奉つた處、大神は大いに喜び給ひ、

「こは蒼生の食つて活くべき物なり」と宜ひ稻種を天狹田及び長田と言ふ水田に植えられ、粟、稗、麥、豆を陸田に植えられ又養蠶牧畜の道を講じて萬民を愛撫せられたとある。(以上日本書記釋)

養蠶の業は實にこの時に創つたと云ふ。即ち口裏に蠶を含み絲を抽き取るとある。實に保食神は五穀の神であり、養蠶の神である。

後年雄略天皇の御代大神の御誨であると言つて伊勢の外宮に迎へ祀つた花桑の神豊受大神も稻荷大明神として荷稻神社に祭つてある倉稻魂命も矢張異名同神である。

我邦各地に祭つてある蠶神と言ふのは實に

天照大神

保食神

天熊人神

の三神である。

二、古事記に現はれたる蠶の神話

須佐之男命食物を大氣津比賣神に乞ひ給ひしに大氣津比賣神の進められるさまも亦保食神と同様であつた

命これを穢はしとして怒つてこれを殺し給ふた。然るにその死した神の頭に蠶が生れた。そして神蠶巢白御祖神これを取らしめ給ふた。

かくの如く此處彼處に蠶を生じたから繭絲が國土にあらはれたのである。是れ繭の原料たる繭絲の我邦に於ける起源である。

紀、記は我邦に於ける貴重にして權威ある古典である。何れを正、何れを否とするかは出来ない。文學博士黒川眞頼氏は

「先哲の説に蠶の起源は保食神と大氣津比賣神との頭部に生じ、二神が殺されたるも同様な子をもつて合せて一事とし、これを殺したる日夜見尊須佐之男命をも合せて一神となして解けるものもあるは古典を私かに解き曲ぐるものにて其謂なきことなり二神初めて惡穢物を化して清淨物となして獻するを見れば怒りて之を斬り殺し給ひしなり、然れば斬殺の狀も亦同じきは是を以つて一事に合せ解かむとするはかへすがへすも謂なし」と述べられた。されば氏は我邦の蠶の起源に二ありと述べられたる。

又大日本花史の考證する處によれば

「皇祖天照大神日讀命に詔はく、人は物を食ひて生く朕の大八洲國に保食神ありて食物を保てりと聞く汝就て之を候へよ」と尊因つて保食神の許に至る。保食神首を廻らして國に向へば飯口より出で、海に向へば魚類出で、山に向へば獸類出づ、其出でたる所の物をもつて尊に饗す。尊その口より出でたるをもつて穢はしとして大いに怒つて保食神を

斬る。大神は尊の殘忍の所爲を惡みて相見給はず、尊因つて夜見國に就き給へり。

大神は天熊人をしてゆきて看せしむるに保食神已に死せり。其神の体に牛、馬、粟、稗、麥、大豆、小豆及び蠶生ぜり、天熊人は是をとりて進獻す。大神甚だ喜びて曰く「是の物は蒼生の食ひて活く可きものなり。」と

乃ち粟、稗、麥、大豆を以つて陸田種子となし稻を以つて水田種子と爲す、是に於て五穀、牛馬、蠶あり、既に天狹田及び長田に播種せしめ其の秋に至り垂穎八握莫に然て甚だ快し又口に蠶を含みて絲を抽くことを得たり乃ち天御杵命をして織神服司となし、天八千千姫を織女となす。天八千千姫は桑葉を天香具山に植えて蠶を飼ひその絲を以て神衣を織りて供進す。是に於て初めて花桑の業あり」とあり。

「而して本邦蠶業の事を叙するもの往々此事を以て支那より輸入したるものとなし、其起源は正しく人皇十四代仲哀朝にありと爲すものあり、甚だ謬れり」とある。

之等の舊記を以て見るに二説あるにしても我邦の蠶業起源は遠く神代にありし事更に疑を容るゝの餘地はない。

我邦神代の織物

以上述べたる如く我邦繭絲の起源を正しく神代にあるが、然らば神人は皆絹施を服せしかと言ふに然らず、木皮の織維なるを取りて布類を製し、之を常用したのである。

「前略上文に述べたる所は繭絲の起源なるが繭絲ありて初めて絹施あり、然らば太古の神人悉く皆常に絹施を服せしにやと言ふにはあらず繭絲は五穀、牛馬と共に生ぜしかど、太古の神人等しく絹施を服し、等しく五穀を食ひ、等しく牛馬を使用せざりしなり。繭絲、五穀、牛馬は特に神聖なる賜物にして世に勤なりしものなるが故に、太古は木皮の織維あるを採りて以て繭絲と並び用ふ。草木の實を採りて以て五穀と並び用ひ、牛馬に至りてはこれを使用するものあり、使用せざるものあり。故に神人の常用は衣は布類を以つてし食は草木の實を以てせり。天照大神耕織の業を開き給ふに及び農業先開け、然して後織業これにつぐ。然して織業の中養蠶の業まだ歩を進めず從來の草皮を用いて紡織するを常とせり。其の徴を言はゞ古語拾遺に天照大神天箱に入り給ひし條に

「時に天照大神は大ひに御怒りたまひ、天石箱に入られて盤石を閉じて其の中に籠られたまふ。かくてあめのした何處も彼處も眞暗闇と化して多くの神々様は怨い迷つて燭を點じて僅に用を足し給ふ。高皇產靈神が八十萬の神達を天八洲河原に會して日神の御心を和け直し奉る陳謝の方策を評議された。爰で思兼神が深く思ひ遠く慮つて提議して言はれるのに太玉神をして諸部の神達を指圖させて和幣を遣らせよ、それから石凝姥神(天櫛戸命の子、鐘作りの祖)をして天の香山の銅をとり、これをもつて日像の鏡を鑄らせ、長白羽神(伊勢の國麻績の祖神、今俗に衣服を白羽と云ふものはこの謂である)をして麻を植え、それで青和幣を作ら

せ、天日鷲神、津昨見神をして裁の木を種殖させ、それで以て白和幣（是れは木綿である。以上二つの物は一夜で生ひ茂つた）を作らせ、天日鷲雄神（倭女の遠祖である）をして文布を織らせ、天棚機姫神をして神衣所謂和衣を織らせ云々……と見えたり。是爾絲は既にありと雖も、神聲の特賜のものにて世に多からず、故に神前に供する所のものは麻布穀布なるを是に至りて更に其紡織並に精美を盡して献進せしを見る。此の文布と爾岐多倍とは普通に超えたる織物なるが故に、天照大神の石箱を出て御覽せられて頃日の御怒も解け給ひき。此の如く布類には美術を盡したるを見て、爾蠶の業は未だ弘まらざりしを了知すべし、此の布は織業に無比なる天日鷲雄神、天棚機姫神の製造せられしものなることは、古語拾遺に言へるが如し。云々。即ち恩兼神の神策を以て種々の美術品を作らしめて、之を石箱の前に供し、大御神の石箱を出で給はんことを祈禱する謀計を述べられし等、其の美術品中の織物に未だ絹を用ひず、これを見ても太古に絹を製するの業の進まざりしは明らかである。

から、其絲は勿論精良ならず、又其養蠶の法も其拙く、蠶の老い過ぎるを知らざりし爲、玉繭多く生じ、従つてその絲は多く下等品であつた。さればこれに依りて出来た織物は凡て粗悪品のみであつた。然るに蠶、麻を紡ぎて絲となし製造する所の布類は其の製造術を長じてゐるから甚だ精巧であつた。因つて貴人の衣服は勿論、天神地祇に奉獻する幣物も、皆布類を用ひて絹を使用することはなかつた。従つて絹の業は甚だ微々たるものであつたのである。左に太古よりあつたと云ふ織物の文獻を黒川博士の工藝資料中から抄録して見やう。

羅

羅は太古よりあり、或は之を字須波多と云ふ。又阿幾豆志と云ふ。又一種志に良岐と云ふものあり。織文あるを以て名づく、或は之を知々といふ。（工藝資料）

布

布は太古よりあり、棚機姫能く之を製す。その製する所のものは楮布（多閉は絹布の總稱なり然れ共特に楮布を以て多閉と言ふ）と麻布となり。楮布は楮皮を晒して木綿とす、之を志良爾岐天といふ志良爾岐天を續いで絲を作りもつて織る。是を志呂多閉と言ふ。麻布は麻皮を晒して木綿となす、之を阿良爾岐天といふ。阿良爾岐天を絲と爲し以て織る之を阿良多閉といふ。太古の人多く爾岐多閉阿良多閉を持つて服を爲す。又苧布あり、苧布の中に縮文あるを志々良岐又は知々と言ふ。又志奈布葛布あり、卑賤の者之を以て服となすこれを製する法は楮布麻布に

同じ。而して志奈布、葛布も亦阿良多閉といふ（工藝資料）

倭文布

倭文布は太古よりあり、或は之を志豆波多といふ。又阿夜といふ。建築機命始めて之を製す。故に建築機命を稱して倭文布の神と云ふ。楮布、麻布、苧布の絲を青葉等の色に染めて以て横抑條を織成せるものなり。本邦に於て花章と稱するは倭文布を以て始となす（工藝資料）

絹

絹は太古よりあり。棚機姫能く之を織る。（工藝資料）即太古に使用したものは穀又は麻から造つたものが主であつたからである。――つゞ――

信州ごころごころ

確氷茂

濃い緑の葉が重さうに揺れてゐる。何處からも覗いてゐるのは青葉である。さても青葉にめぐまれたところ。ここは母校上田の學校。そして校長室。僕が尋ねて行つたので、わざわざ針塚先生は上田公會堂から歸つて来て下さつたのであつた。校長室で校長先生と浦生教授と倉澤さんから最近の様子をうかがう。その晩、浦生・倉澤・林・齋藤・野口の諸先輩同僚林太郎氏から厚い歓迎を受ける。（六月十五日）

× × ×
ここは長野縣廳蠶絲課。總じて官廳は無味乾燥だがこもその邊にははりはない。だからといつてその中に呼吸してゐる人達が無味乾燥であるわけではない。その反對の場合が

多い。ここにゐられる人達は何れも心の温かい人達であると聞く。ここには鶴田さん。南澤さん。大池さん達がゐられる。（六月十六日）

× × ×
松本市の鎮摩社内、活動家の宮崎秋雄君が蠶品種の試験をやつてゐた。その晩松本市で泊つたら、隣室に水井謙一郎さんが泊つてゐられた。但しそれは次の朝しかも出て行く自動車の中から聲をかけたこと。この自動車で久保田松本場長と一緒に出かけられた。（六月十七日）

× × ×
次の朝松本の蠶業試験場へ行く。上林さんから説明を聞く。氏は天蠶（だと思ふ）の蠶組についての研究を話して下さつた。國立蠶業試験場へ行く。水野場長から話を承る。淺野君・高橋君等に面會。淺野君に連れられて普及社を尋ねる。例の著名な繭倉庫を見る。（六月十八日）

× × ×
ここは村井の組合製絲共榮社。この蠶種部長は丸山俊一郎さん。午前中原料政策につき話を承る。赤津君にも面會。赤津君に連れられて蠶尻の共榮社製絲場並に蠶絲製造所を見る。續いて塩尻峠を自動車で超えて小野へつく。この共榮社製絲場を見せて貰ふ。（六月十九日）

× × ×
ここは下伊那の喬木村、龍東館製絲場。そしてその二階。ここに長野縣廳の産業組合關係者數名と絲聯の飯島技師が、組合の幹部と、生絲の「絲聯」出荷につき懇談してゐる。どうも話がうまく進みさうにない。絲

聯出荷缺裂の雲行きを見せてゐる（後で遂に絲聯出荷に決定した。）その晩、飯島技師、皆川蠶業試験場飯田支場長、永田取締所長、同僚宮澤勇君と素晴らしい景色のよい「家」で飲む。（六月二十日）

× × ×
朝宮澤君の私宅を尋ねる。奥さんから歡迎される。奥さんには嘗て面識がある。それから諏訪へのす。茅野で下車して龍上社を尋ねる。その足で上諏訪神社參詣。上諏訪――湯の町で泊る。（六月二十一日）

× × ×
次の朝、諏訪町製絲、四賀製絲、金澤製絲、落合製絲等の組合製絲を見て山梨へ出る。甲府で下車して縣農會の吉川さんを尋ねる。その晩吉川さんにつれられて甲府の街を見て歩き、吉川さんの下宿、米倉旅館でねる。（六月二十二日）

× × ×
暑い夏である。氷屋の儲かる夏である。時々病人が出来るので、その時々氷買ひにやつて行くが、その度び毎に氷の値が上つてゐる。

× × ×
今日（七月二十五日）アメリカへ旅立つた船、それは大洋丸である。獨乙からの戦利品であるとかいふ大洋丸。それへ日本の生絲老代表を載せて行つた。午後三時横濱埠頭解纜。波を蹴たてて太平洋へ滑り出した。御苦勞なこと何れも老人。もつと潑刺たる若者の姿も加へて欲しかった。海上並びに渡米後の健康を祈つて止まない。願はくは、生絲の海外消費宣傳が單なる代表の遊びことに終らざらんことを、と同時に日本蠶

絲業が單に老人の活動のみによる蠶絲業である。といふことを消費國に印象付けたいことを。

× ×
こ一、二日東京は雨模様だ。そしてそれだけに事實涼しくもある。涼しくあつて欲しい。それは第一にわれわれを健康に停め置くが故にだ。第二にわれわれの貧しい生活から出費を多くせしめないためにだ。

× ×
ついでこの頃だ。僕の隣の家へ盗賊が道入つた。隣の人達が海水浴に行つてゐるのを知つて多分道入つたのだらう。朝早く隣の台所の戸が開いてゐるのを見て、僕の家の者が發見したので。直ぐ交番へとどけた。お巡さんがやつて来た。一應調べた上お巡さんはいふ。

「これは素人ですね。どうもやり口が玄人らしくないです。第一マツチをするなどといふのは素人です。玄人は電燈をつけます。」

電報を打つてやつたら隣の主人公が歸つて来た。話によると大切な衣類は全部あづけておいたから被害は極く輕小だつたといふことだ。それにしても盗賊に盗入られることは心持ちがよくない、といつて次の日に引越してつた。

夏らしくない話だ。もうちつと冷しい話聞き度いものだ。

(一九三三・七・二八)

鎖夏寓語

蕉

災禍

新聞で見ると母國の昨今は非道い

旱魃で困つて居るらしい。本誌の「編輯便り」にも今年の暑さは殺人的だ

とある。満洲の暑さも今年は相當なものだ。暑とも筆者渡滿以來今年位暑さの續く事は一寸無いやうだ。窓を閉めては一寸寝られぬ位だから軍務多忙な兵隊さんは大變だらう！然し幸ひと雨の分布が非常によいから今年は満洲は概して大豊作だ。大体に於て満洲の豊凶の定まる條件は極めて單純だ。降れば豊年、乾けば凶作。七月以後は例年雨が相當あるので問題は播種期に相當する四、五月と發育の前期である六月に數回の雨があれば豊作と決めて良い位である。

其處に行くと母國日本は余りに自然的災害が多過ぎる。養蠶にしても晩霜、早魃、多雨により遠慮。一般農業から云つても旱魃、多雨、洪水、そして殺人的凶作。それから地震、火事、建物の關係上満洲には非常に多い」となると一寸脱線の意味だが、満洲生活にはこれに「親父」と云ふ奴が無いから——寧ろ遠く家郷を離れて居るから親父の消息などは日常生活の中の一の魅力だとも云へる——益々この感が深い。一年として晩霜、早魃、多雨、洪水、地震等云ふ災害の脅威から全く解放される事のないのか母國の農業の姿のやうに思はれる。

筆者は常に東北地方出身の同僚に「大抵五年か七年かに一度は必ず草の根や木の皮を喰らねばならぬやうな凶作に見舞はねばならぬ事に決つて居る處に人間が住むのが間違つてゐるんだ。」と云つては憎しみを買ふのぢが現地在住の同窓諸兄は果

して何ふ思はれるか？

然し満洲にも凶作はある。幸ひに筆者渡滿以來滿六年間は一度も遭遇しないが斯くもあらうかと思はせられたのは昨年局部的に粟に夜盗虫が發生して一町歩、二町歩と云ふ廣い畑が全部粟の中肋だけを殘して喰ひ去られたのを鞍山地方で見た際である。

大体、作物が高梁、粟、大豆と云ふやうに種別の單純なものによるか、兎も角減少には無い事だが一旦害蟲が大發生したら被害が非常に大きいやうで大正何年か、當地々方に夜盗蟲の大發生をした時にはその大集團が鐵道線路を横切つた爲に汽車が動かなくなつたと云ふ事を今日でも試験場の先輩に聞かされる位である。

その上母國にないもので満洲にあるのは匪禍である。然し乍ら二、三年前、母校の井上先生の御來滿の際の話と記憶に残つて居るが母國でも東京郊外の郊外生活の不安と云ふものは相當なもので筆者等が留守居も置かず戸締もせず温泉通ひをしたり、夜窓を開けたまま寝ても翌朝チヤンと胸を穿たれずに残つてゐるとお話したら、それでは東京郊外より安全だと云はれた事があるから必ずしも満洲特産では無いかも知れぬが滿洲式特徴だけはあらう。

昨今滿鐵線を汽車で旅行すると彼方此方で高粱の刈り取りが行はれて居る。勿論幾等狂人陽氣でも今時分實つた譯ぢやなく、所謂馬賊匪害から鐵道を守らうと云ふ主旨からその筋からの命では一鐵道の西側五〇〇米宛の間には高粱、包米の栽培を禁ずる」と云ふのである。事實高粱

畑のある限り、如何なる悪事を働いても一歩畑中に身を隠せば發見される事絶体に無しと云ふのであるからこの位適切な命令はないのだが車中高梁の繁茂が眺められないとなると旅行者にとつては淋しいし、農民にとつては痛苦である事勿論である。刈取命令にも拘らず未練らしく途中から折曲げられた包米等を見ると一寸憂鬱にならざるを得ない。〇〇に於て約一〇〇〇名の匪賊の歸順式の時、最右翼に軍装も厳しく竝んだのが同地某邦人菓子屋の若き番頭氏、其處で知人の一人が何故にお前は斯んな處に列んで居るのかと詰ると彼氏實然と云ふ事が「私はこの副團長です。」彼は事實副團長だつたが前記の菓子屋に雇はれ中警察にも配達すれば、守備隊にも税金に行く

と云ふ譯でその方面の消息は細大となく膝報し得たと云ふ。此處に感心なのは雇主に對しては一錢一厘たりとも間違ひの無かつたと云ふ美談？が残つた事である。更に彼氏、街の官民を招じて一大盛宴を張り「今は私も皆様同様の良民となつたのですから何卒よろしく。」と挨拶したと云ふ。話として聞いて居る限りは斯んなのは罪が無い方だ。

匪禍に就て書く事になれば昨今の満洲にはまだ一種はある。昨午安奉線で急行列車が襲撃を受けた際に一番不運だつた男が頸部貫通銃創で即死、一番幸運だつた人が「洋服の背に彈痕一ヶ。而も胸のボタン一ヶが彈丸と共に行く方不明となつて當人は微傷に負はなかつた」との事。何れも滿鐵社員の話に間違ひは無けれども聞く身にとつて見れば少し物語りめき過ぎて少々氣味が悪い。尤もこれで幾分でも神信心、女房孝行になれれば轉禍爲福ではある。

それは兎も角今年の満洲は昨年の今頃に比べて馬賊騷も減切り少くなつて王道樂土の基礎愈々固きを思はしめるのは有難い事だ、處が當處に困つた事は試験場に古くから居つた滿洲人の場員が續々として退職して滿洲國官吏に登庸される事だ。待遇が二倍—三倍と云ふのであるから無理もない一面、彼等こそ滿洲國の基礎を固むるに最適の人士たる事は疑はぬけれども吾々にとつて見れば手足を奪れるやうで痛苦の種ではある。現に筆者の如きもよく「アウスタント」を失つた悔みを持つものであつて見ればこれも一つの災禍の一面相である。

兎も角も今時日本語の語せる滿洲人だつたら就職條件は思ひのまゝ、同時に支那語の解る日本人も随分と有利に働ける譯、例へば學校の先生等に對する就職口等も相當あるらしいけれども一概に支那語——滿洲語の點で難關に打突かる。

就職の事から云へば近時種々な點から左様なつた事と思ふが除隊した兵隊さんが大持の事。何にしても滿鐵等も滿洲國の鐵道の委任經營によつて一躍その經營線路が五倍以上になつたのであるから人を要する程度も察せられる。

今一つ、事變後特に昨年邊り匪賊の鐵道襲撃頻々たることから「鐵道警備員」なる者を臨時に採用、丁度寒さに向つた折柄でもあり命懸けの仕事でもあつたから相當悲壯なことでは

ある。

ある。

ある。

ある。

ある。

もあり御苦勞な話でもあつたのであるが、一面、當時採用された人々の大部分は所謂滿洲熱に浮かされて漫然と來滿、當時殆ど「ルンペン」に近き生活にあつた人々だつたのだし、それが一躍手當を加へて月、百圓以上の收入を得る事になつたので、それ等の人々の一部すら「馬賊様々」と云ふ言葉が出たと云ふ。

まこと、浮世の事は何が幸ひするか解らない。筆者等もその中には自分でも吃驚するやうな出世の緒が、又は何百萬圓の遺産相続の幸運に巡り遭はぬとも限らぬとせいで、甘い夢を見て居る。

菓子と同様人間も成るべくならば甘い方が人には喜ばれると云ふ。

七月末日稿

横濱から桐生足利へ

香山 清和

A スクリーン捺染

從來の型紙捺染の劃時代的進歩を考へられるものにスクリーン捺染と云ふ方法がある之は特殊の寫眞器で實物なり模様を寫し陰畫を作る。之を原板にして幾枚かのガラスの陽畫を作る。之の陽畫のフィルムをぬれてゐる物をガラスから剝し（乾板に對し濕板と云ふ。寫眞銅板に同じ）別に用意したる大きなセルロイド板に模様を繼合せて幾枚か張り捺染せんとする布幅と同じ大さの模様にする。次に絹篩に感光器を塗つたものに之を合せて青寫眞に於ける如く數分間日光に露出させる。之を水洗するを感光せぬ部分の幕は洗除されて絹篩目のみとなり所要の模様を得ら

れる。之を枠に取付けたものを型紙捺染の如く色糊を置き刷毛等にて捺染するものである。

之の方法に依ると普通の模様でも型紙を作る手数が半分以上に節約され尙從來の方法では不可能である寫眞等の捺染が容易に出来ること云ふ處が重要な特色である。

B リング精紡機時代

ウーレンに於てミュールの代用としてリング精紡機の使用を開始せる工場あるを聞く。勿論ほんの試験的使用ではあるが毛絲紡績にとつての慶賀すべき事である。

元來このリング精紡機は毛絲紡績用として古くから考案せられたものであるに拘らず絲の軟味を失ふと云ふ理由の爲めに實用に至らなかつたものである。

採算不引合の爲めに能率増進に向ひ狂弄する絹絲紡績は細絲に於てミュールを廢止しリングの採用を斷行した。そして次の様な利益を吾々に提示した。

一、出來高が五〇%増加した
二、床面積が一四に節約せられた
三、機械の價格が一五で済む
四、動力半分以下で充分である

然も製品はミュールのそれに較べて何等缺點を認めなかつたと云ふてゐる。

ウーレンでリングを使用しなかつた理由は勿論品質問題にあるにせよ尙其の外に殊更に新しい方法を採用せねばならぬ程困つて居らぬ事に原因してゐるは事實である。

以上はウーレンの話であるがモスリンでもミュールをリング精紡機に

變更の可能性は充分ある。矢張品質を云々するけれども之は變更された當座丈けの問題ではなからうか。

次は麻絲紡績に就て考へ度い。麻絲紡績ではフライヤー精紡機を採用し回轉數の少いの困り抜いてゐる。之もリング精紡機を使用したら打開出來はせぬかと思ふ。

かくて既にリングを採用してゐる綿紡、絹紡を加へて各種紡績がリング精紡機になる時を想像して見る。

C 銘仙染色の動き

織物の片面にだけ捺染して兩面模様を得る事は染色の宿年の望みであつた。その爲めに兩毛地方の解織が生れたのだ。則ち絲で浸染し假織したものに捺染を試み然る後製織する事に依り兩面模様を得てゐたのである。

始めの解織は色も模様も不鮮明なものであつた。長い流行の續いてゐる間に漸次改良されて從來と全く方法を異にした摺込捺染と云ふものに迄發展し反轉模様に近い様な美しい模様が得られ然も工費も大に節約されるに至つた。然し解織では經絲のみに模様を置くのであるから模様の多少づけるのは仕方がなく然も手数が繁雜なのは免れぬ處であつた。

近頃染色業の非常なる進歩に依り布にしてから加工する所謂生地加工に依つて兩面模様を得る方法が漸く盛んにならんとしてゐる。この一例は適當の糊と滲透劑を應用し特殊の染色方法を施すものでリダクンヨン加工である。この生地加工は現在の處では未だ多くの缺點を尙し全般的に使用されるには至らぬが解織

に代るべきものとして期待出来るものではある。

D 上田を憶ふ

桐生と云ふ名前は何處かみやびやかな、奥床しいそして古めかしい處を想像させるが實際はとてもモダンな都市である。カフエーの多いのに驚く。其の上こんな小さい處にダンスホール迄あると云ふのだから呆れたものだ。凡そ世の新しいと云ふ新しいものは何んでも揃へたいのであらう。其處に時代の先端を行く桐生の人々が想像される。この性格があつてこそ斬新の意匠に生きて行く日本有数の機業地桐生の生命があるのだ。

南に渡良瀬川の清流三方を縁の山に圍れた桐生、京都を思はせる様な美しさだ。然し如何に日本は小さいとは云へよくこんな狭い處にこうも家を建籠めたものと思ふ。

この山に圍まれて川を有すると云ふ事は絹業地の特色ではないかと思ふ。足利、八王子、福井、京都、米澤例を挙げれば幾らでもある。

こんな風に考へて來た時ふと我等が故郷上田の地勢がこの特色に一致してゐる事に氣が付く。上田も染織に好適の地なのだ。雨が少なく、乾燥する。空氣は清い。風は吹かぬ。千曲の清流は利用される。この特徴を利用し江戸の芝居の衣裳に用ひられる迄隆盛を致した往時の人々の賢明さに感歎すると共に現在の衰微をまねいたは誰の罪かと聞いて見たくなる。菅平の宣傳をするもよい。然し忘れてはならぬ上田市の眞の繁榮を致すものは絹の染織業である事を

街路樹の蔭で

青草 遊馬

人生の行路は大空をゆく浮雲に似て居る。

西に東に風の間に間に浮動して定まつた軌道もなく、目的もない。只其時の感情と理性に任せて涯無き生存の曠野をゆく。だから我々の未來は唯謎の幕を通して幻に存在を知り得るのみで内容の想像は全く許されない。

時に易に頼つて取とめのない自己から逃れて自分の行方等を定めて居る人もあるが、あれは全く焦慮の結果起る所の一種の自己満足に過ぎない。

理解し得て摺得出來ないのが自己の歩みつゝある人生の全貌である。考へ方如何では亦其處に餘蘊の趣味があり生甲斐があるかも知れぬ。

先づ前置は此位にして田舎から都への氣まぐれな人生の軌道に乗つて出た事の愚感につき駄辯を弄さう。

春四月雪解の水と共に古城のほとりの三星霜の朗らかなカレツドライフも流れ去り現に角一人前の成人として社會の波浪を乗り切る可く飛び出した。

未だ黄色の消へ失せぬ唇も脊廣とソフトに依つて被護されて天晴スマイトなサラリーマンとして堂々と（格好だけ）世の中に一步を刻んだ。

二十有餘歳の星霜を高原信州の山國に、自然の愛を恣にして育つて來た自分が如何に風の惡戯とは云へか様に急旋廻をして日本の心臓東都の住人にならうとは夢想だになかつた。清楚優雅なる自然の姿に比して又何と都は毒々しき人工美に充

たされて居る事よ！。飽く迄都は濃美麗麗に作られて居る。空は煤煙に道路はアスファルトに自然と云ふものは全然微塵隠され正に都は自然に對する反逆の天地の如き感じがする。瞬間的にはネオンサインのきらびやかな美しさに魅惑される。併し此美は到底高原の瑩光に比す可くもない。

一見頗る複雑化して居るものゝ内容の美を持たぬ都は少しも心に感銘を與へぬ。これに比すれば田舎は確に單調ではあるが、此中に含む簡素にして健康なる沈黙の美は吾人に不朽の美を與へずには置かない。

坦々たる水日の美しさ。壓縮的な色濃い粉粧の誘惑を離れて自然は飽く迄開放的である。赤裸々たる心情を吐露して我々を其の暖い腕に抱いて呉れる。此懷より詩の調が流れ創作の泉が湧き出づるのも豈偶然の事ではない。

人間は或る程度環境に支配される。輕薄なる思想が都にはびこり、質朴な氣風と濃やかなる情愛が田舎に育てられるのも是環境の然らしめる必然的現象なのであらう。

一九三三年三月三十一日生活の資を求めんとして長旅を續けて初めて上野驛頭に立つて薄暮に包まれてゆく都の現實を凝視した時、恐怖と戦慄の不安な氣持に襲はれた。

壓する如く低く垂れ下つた灰色の空、その下で如何にも忙しげに往き來する人馬の走り、絶間なく耳を聳し來る車のきしり。苦しさそうに同化作用を續けて居る街路樹の葉。むせ返る様な空氣。都は全く文化の洪水の様に思はれた。

此騒しい雰圍氣中に呼吸して神経衰弱症に陥らざる都人に奇異の眼を見張つたのもあながら自分一人ではあるまい。

視覚と聴覚とを一〇〇%以上に働かせねば道路を歩む上に於て身體の保證を保たねとは實に「住み難きは都かな」の感を深くする。あらゆる建物は夕もやの中に冷たく力無く建てられて居る。如何に生活の糧を得んが爲めとは云へ果して此沙漠の如き屋根の下を自分の永住の住家となし得るだらうかと未來に對して少からず疑の念を抱いた。

併し案ずるよりは生むが易しの昔人の言に背かず四ヶ月の光陰を過去に流して赤ゲットの小生も幾分都ナイズされたか近頃は夫して苦痛も感ぜぬ様になつた。

だが人間は矢張り自然の子である。別して美しい故郷を持つ自分がどうして自然を忘れ得よう。自然への憧憬の念は常に強く燃え續けて居る。だから時間と經濟の許す限り郊外へ歩を運ぶ。と云つても錢の單位を半徑として畫いた範圍内の散歩しか許されぬ現在の狀態では慾望を充たすに充分な條件に浸す事は到底不可能な問題である。

菅平の高原に於ける如く牧場の牛馬と共に鈴蘭の香に疲れを癒して一日を樂しむと云ふ氣分は到底豫想だに出来ぬ。

都入りをして空氣に對する感覺が非常に鋭敏になつた。田舎の空氣は美味で都のそれは誠に不美だ。現に角空氣に對する味覺の増加した事は最大收穫の一つであらう。

もう十時過ぎだ。明日のためにもあ

る。書くに余りにも狭く與へられた空ではあるが菅平の野營で頭上にまたいたあの星を想ひつゝ靜かに筆を擱く。

夏の陽は燃える

番 人生

駄作「大島、伊豆の旅」は其後心境の變化並環境の變化で中止してしまつた。別に終結を要する創作でも無いんだから若い間無に俺の頭を去來する感情に支配されてもいと思ふ。

夏になつた。六月の俸給貰つたらバナナが欲しくなつた。今（七月五日）はそんなこと消し飛んでしまつたけれど。

七月一日から役所では「暑」と言ふ事が出ない。これはU技師立法の「言語取締法」に依る。

第一條に「暑」の一語に付金五錢の罰金を、と明記してある。俺はもう二十錢納めた。その金が今日で一圓二十錢になつたので嶋員一名でアイスクリームを飲む？だ。「暑」が液化して又固化すると冷くなる。飲むでも汗は止まらなかつた。

七月三十日に移轉した。鶯谷から大井へ。數えて見たら大小取交せて五回目である。今度はとあるアパートに頑張つて居る。アパート生活はこれで二回目である。以前蒲田のアパートに居たことがある。その時は孤獨に泣いたが俺の様な性格の者にはこの蜂巣が一番好いらしい。今度動く時は結婚する時だと思つて居る。だが未だ相手が居ないんだから凡そ意味無い。

自分では少しも書かずに居て友達

からの便を待つて居る。考えて見ると成立しない方程式だがこの感情はどうする事も出来ない、自分でも書いては見るのだが何かもの足りなさがあつて破いてしまふ。

狭くはあるが六疊の部屋で幸福の満足をして居る。窓から上半身突出せば大空の過半を見る事が出来る。

× × ×
繭絲課同窓は皆元氣で居られる。俺の島へ室岡君が新加入した。俺もどうやら指導精神を起さにやならん。そう何時迄で先輩にだゝはこねられん。産業組合課へ先輩福島氏が來られた。二仁の歓迎會を去る六月三十日品川の牛若丸で開く。

× × ×
N技手はこの席上幹事辭任を申出たが許されなかつた。蓋し名幹事たるが爲めである。

御台場の陰から白帆が二ツ三ツ出た。夕暮は美しかった。八時散會以後不詳。

× × ×
「嫁の話」と云ふ話題は何時何所で誰れ彼に聞かせず人氣がある。俺もそんな話する様になつた。年齢表を見ては今度は誰れかなと見ては鼻をうごめかす（あゝ淺ましい）俺の友達にも求婚公廣を出して居るのが居る。余り若いのを望むで居るので心配だ。俺の時分には不足するかなと思ふ。

× × ×
俺達の作つて居るのにヤラウ會と云ふのがある。秘密結社だから會員名は公表出来ない。この會では責任を持つて嫁の世話と酒の世話とはして呉れるから幾分安心はして居るけれど。

× × ×

「街路樹のある輔道」は現實にはほこりと公廣と紙屑で一杯である。無いよりは好いと言つても深呼吸をぞ出来ない。毎日毎日息苦しい歩みを運ぶ。

× × ×
時に逃れて郊外へゆく。歸つて來て都の空氣を數する許りだ。早く都ナイズされ様と思つても高原の澄み切つた星空が去らぬ。夕陽を浴びて棚引く淺間の煙も白銀にさんたる八ヶ岳の峯も唯追憶と夢への登場となつてしまつた。然しこの儘にして置かふとは思つて居ない。何時か其の時を得て若き日の古戰場（登山は全く自然と俺との抗争であつたから）を訪れて見度ひと思つて居る。

× × ×
繭絲業法が施行されてからもう半年以上経つ。俺が役所入りして始めて當つた法律らしい法律はこれが始めてだつた。今まで判らなかつた事が知れる。一例を挙げれば如何に多數の工場が廢業したり休むだり始めたり開業したりして居るか云ふ事だ。俺達の知らない事で何時も生存の競争が行はれて居る。販れて起たざるものはその慘状を一通の屈書にして出さねばならない。時を得て興隆したものは又凱歌を通過して來る。

× × ×
一國一城の歴史は更らに悲喜交々であるは無理からぬ事である。

× × ×
「幾度か榮枯の夢」と鳥村は歌つて居る。過去の衰盛は時に美化されて歴史の調べともならぶが現實のそれは余りに痛々しい。一通の書類として見るに余りに多くの現實を物語つて居る。

家を出て五町許りは
用のある人のごとくに
歩いてみたれど――
と啄木は歌った。が勤めを得てから
又

二晩おきに
夜の一時頃に切通の坂を上りしも
勤めなればかな
と歌つて居る。私には未だ妻子が無
いので、それに未だ幾分の奇蹟や偶
然をも生活に織入れて居るので、そ
んなに強い生活苦を味つたり又未だ
への希望を失はぬが――それもわか
らぬ。

× × ×
たはごと許り言つて居られんので
此頃唯我獨尊の天地を開らかふと思
つて居る。U・Hの言つた「天と語
れ」を實行する。

× × ×
今朝(七日)危いなアと思ひ乍らも
洋傘持てゆかなかつたら忽ち「初夏
の驟雨」にやられてしまつた。「巴里
の屋根の下」驟雨で始つて居た。役所
の出口で 停車場の出口で何か素晴
らしいロマンチックな出来は無いが
なアと心待ちに待つて居たが現實に
は矢張り起らなかつた。唯知合いの
男女が二組、三組インギンに姿を消
したに過ぎなかつた。

× × ×
天地が清掃された。居根の上に軒
の上に、時があつたら飛込ふと待ち
構へて居た煤煙も洗落されてしまつ
た事だらふ。歸つて来て窓を開ける
に氣持がよかつた。

× × ×
鱗雲が夕陽から放射されたかの様
に晴れ上つた空に泳いで居る。

× × ×
午前十一時校長先生が來られた。
文部省へ學校の豫算を説明のため御

上京の途次に御寄り下すつた何時も
乍らの御元氣である。小生を見て
「随分日焼けしたなア」と言われた。
「今夏の山の計畫は」とお聞きすると
「學生が未だ皆實習をやつて居るか
ら何も樹てゝ無い」と言はれた。吾
々が三年間無事勉學し暮し得たも一
にこの心使ひからである。晝食を會
食して御別れた。御忙しい御身体
なので、學生時代の煩悶を挟むで言
ひ度い事を言つた様な具合にはゆか
なかつたけれど昔を想ふに充分であ
つた。

暑中御見舞

本間 國夫

新京實業部
農務科

× × ×
論語に「孔子曰。君子有三畏。畏天
命。畏大人。畏聖人之言」とある。これ
丈にして貫ねば修養の如何に依つて
は君子の三畏の方丈は出来そうだが
ら上皮の方丈でもやらふと思ふ。級
友よ俺の心境の變化を解せよ。

× × ×
好い月夜だ。雲に下半身をかくさ
れた月はいい。見渡す限り連つて居
る。屋根が強く弱く光下に輝いて居
る。

× × ×
この屋根の下には未だ働きつゝあ
る人間と、ねそべつて月を見て居
る人間とが雑居して居る。都會の屋
根はそれで強く弱く呼吸する。
くたされた。ではさいなら。

(一九三三、七、九)

NEWS

放送局

蒲生教授がアルプスを踏破し
たと云ふ驚異的なレコード

まづ最初に其の動機の内幕を御披
露に及ぶ、但し余り穿ち過ぎて居る
から凡そ九九%は嘘かも知れない。
蒲生さんには神戸に女子専門在學中
の素晴らしいモダンな御令妹(奥
さんの)がある、勿論容姿は現代式
の端麗さ――筆者は不幸にして一度も
見參の光榮に浴しないが――しかも當
代稀に見るアルピニストで信越國境
の高峰峻嶺に足跡通ねからざるなし
と云ふ山の禮賛者である。

毎夏アルプスに親しんだ歸途上田
に駕を枉げ登山に背いて居る兄さん
に幾くさりかの山靈の妖氣を投げつ
けたものである、どんな高山でも彼
れ女流アルピニストにかゝる背の口
に銀座でも散歩する位に軽くあしら
はれる、文學美術英語何でも負けな
いが之ばかりは兄の權柄づくでも頭
が上がらない、よし本年こそは奮勃
たる發心が躍動して乗つてくも無か
つた。茲で氣を廻はす人のために斷
つて置くが此の登山女史も旋ては適
當な配偶者を求めるものと見て差し
支へ無い。

× × ×
こんな動機だか如何だか判らな
い、山本校長の勸誘だつて力強いも
のがあつた、いや蒲生氏健康の内在的
のさけびが主力のものだらふ。
其處で二三助手諸君に案内方を交
渉して見たがまさか逃げをうつたの
でもあるまいが話に乗つて來ない、
止むなく白羽の箭が校長先生に立つ
た、校長先生は山では母校きつての
通であることは御承知の通りで若し

困つたら背負ふてやらふと云ふ親心
で忽ち計畫が成立した、案内者はア
ルプス山麓の校長さん權兵衛と山
本辰五郎氏と吉田隆雄氏である。

七月も末の日、雨の中を不安を抱
いて(？)出かけたものであつた、蒲
生さんの旅装は實に甲斐甲斐しい、
如何見ても登山二十年の知己であ
る、本年度最新式の登山用具型録で
満載である、之を彼女に示すべく
パチリは型の通りと想像する、だが
之に引きかへて權兵衛氏の服装と來
ては余りにアツサリ過ぎてなまけな
い位である、毎朝出勤其の儘の身拵
へ、半靴洋傘一本でリュクサックも
無ければ何でもない、例の巨體をア
ルプスに向つて擡げながら意氣揚々
迫らざるものがある、之でアルプス
が登れるのか」とさぞ蒲生さんの肌
を冷やしたと云ふ、兎に角斯く
の如くして同行四人は奇異な對照に
アルプス雀の話題を供しつゝ、燕から
大天井、大天井から常念と三日に亘
つて何の苦も無く征服して了つた。

× × ×
蒲生さんのカバンにはヘボ醫者では
寄つけない程各種の藥劑が満員し
て居るが之が何の効果もなかつたと
嘆息を發つする程と程左様に威風
凜凜たるものがある、どこかでベッ
を振いてゴシップの種子でも蒔きや
しないかと内々さぐりを入れて見る
がそれらしい痕跡が認められない。
それかあらぬか校長先生からは健脚
俊足を折紙をつけたから大した
ものである、下山後の蒲生さんが口
を嚙いて出る言葉は「君登山すると
オ腹が空いて飯がうまいね！燕から
常念に出る迄の景色はとても良い、
來年はもつと足ごたえのする所への
して見たい」と其の氣焔と思ふ可き

である。
何れ其の中に尻を刺つたらゴシッ
プを放送することゝして天下の同志
に蒲生教授の健康如斯しと放送し御
同慶を満喫して貰ひ度い。次ぎ、
三吉先生の銅像移轉 上田名所
の一つ三吉先生の銅像は長らく蠶業
學校の敷地跡に残されて居たが今
度同校同窓會並に市理事者の肝煎り
で公園に移轉することになつた、場
所は公園の入口から真正面に見える
衝き當りの廣ッばである、不埒な新
聞が鰐と吾が米熊先生をならべて言
葉尻りを弄んだが其の熊の折りの同
一構内であることは確である、此の
位置は公園委員と同窓會側と數次會
見して最適の地を相したのであるか
ら園内屈指の優位たることは言をま
たない、九月初旬起工下旬竣工十月
一日頃先生の七年忌を兼ねて盛大な
移轉式を行ふ豫定とのことである、
朝に夕にはもつとしばしば恩師の風
采に接し得ることもそう遠くはある
まい、恩師三吉先生遊いて已に滿六
ケ年の星霜は流れた、實に懷舊の情
に堪えない次第であつた。

上田近代風景

上田中學では千
曲河畔の南岸に二十五米のプールを
作つて水泳を本格的に始めた勢力は
大概生徒の手間である、水はポンプ
で汲ひ上げるので多少不便が無いで
もないが美しい澄んだ水がプールを
滿々と浸して居る所を見ると千曲の
泥水よりどんなにか知れない。今
に母校でも懇しくなることだらふ。
繭の價格がよくて一寸地方が潤つた
から上田も少しは景氣付いたやう
だ、七月十七、八日の祇園の山車も近
年になく盛大である、夏繭が四割
から五割、之で秋繭が何と来るか！
上田の商人も絲價をにらんで各仕入
れに肝を冷やかして居る、温泉地の
賑ひも昨年と大差ない。早く晴れた
空を仰ぎ見たいものだ。

製絲科より

永年申請中であつた繰繰揚返機械の改造が漸く許可になり近く着工の筈である。

本年の夏蠶は氣候が濕潤であつた爲一般に解舒不良であつた、學校産製絲科一年飼育

日一〇×支一〇五及支一〇五×日一〇〇の平均成績を示せば次の通りである。

謹啓酷暑の候益々御清祥の段奉賀陳者過般五泉町大火類焼の災禍に際しては御叮嚀にも御見舞金を賜り御芳情の程奉深謝候午失禮時報の紙面を拜借し御禮の御摺換申上度如斯御座候
昭和八年七月十五日
新潟縣蠶業試験場
丸山 武夫

千曲會員各位

切歩一六、三% 絲量六七、五瓦
五圓歩掛八〇、四%

以上の如く切歩は例年より余程多く絲量も亦多かつたが解舒は大變悪く類節が多かつた。

今月は製絲部は留守勝であつた爲訪問者も少く又署名していたりかない人も二、三あつた、左に來訪者を掲げる。

七月十日岡本榮一君(絲十五)

恰も絲價暴落の日、最初の摺換が、「今日は絲八百圓です」と事業に熱心なる事如斯、彼氏曰く茹でたり冷したり行つたり歸つたり製絲家でない所の養子口はないかなあ……」

七月十四日滋野文雄君(絲九)

上田へ急用の爲昨夜歸田、製糸部の諸先生出張の爲兩親に會はざるの感あり。

七月三日永井俊郎君(絲十六)

丸子へ出張の途次來校、晝休に驚鳥を飼はせ二戰二敗

山形千曲會

山形千曲會に於ては七月十一日午後五時より左記の通り第七回支會總會を開催せり

森支會長開會を宣し協議に入る

一、役員選舉に關する件

支會長 森干城氏(再選)

代議員 林十郎氏

幹事長 古山宗八氏

幹事 小山田啓三

同 井上兵一氏

同 前田雅弘氏

同 植村忠義氏

左の通り満場一致を以て可決せり

二、今度開會せらるべき代議員會提出問題の件

(イ)養蠶製絲各種連絡機關設置に關する件

(ロ)母校二十五周年記念祝賀事項に關する件

右に對する具体案は代議員出席の際持參する事に定む

三、會計報告の件

全會一致を以て承認す

四、會員提出問題の件

(イ)養蠶製絲蠶種家連絡協同に關する件

十月末日迄に委員會を開催し研究すること

(ロ)蠶絲業に關する懇談の件

會員相互に意見を開陳し懇談せり

提案全部議了したるを以て森支會長閉會辭を述べ續いて懇親會に移り各自歡を盡し盛會裡に散會せり

千曲會日誌

七月十日 例年の通り養蠶製絲各種連絡の各科を通じて夏季校外實習の爲め各府縣へ學生を派遣したるに付支會長へ夫々便宜取計ひ方依頼せり

七月十三日 今秋開會の第七回代議員會提出問題並に母校創立二十五周年記念祝賀式舉行の件に關し各支會長へ照會す

七月十七日 本會々員名簿調製に關する件及母校創立二十五周年記念祝賀式舉行に關する件に付研究會を開催せり

八月四日 故中村幸吉氏(舊姓玉置)の遺族へ有志より送られし弔慰金二十四圓贈呈せり

叙任及辭令

昭和八年六月十七日
新潟縣立高田農學校教諭 深谷正一

公立實業學校教諭ニ任ス

高等官七等ヲ以テ待遇セラル

昭和八年六月十九日
公立實業學校教諭 深谷正一

公立實業學校教諭ニ補ス

昭和八年六月三十日
生絲検査所技師 沖瀧 治

同 竹内五之助

陸軍高等官六等 生絲検査所技師 沖瀧 治

六給俸下賜 宮入 誠一

九給俸下賜 公立實業學校教諭 櫻井 吉利

同 菊田 泰一

陸軍高等官五等ヲ以テ待遇セラル

昭和八年七月七日 群馬縣農林技師 前田 龜雄

因に當日の出席者は森支會長以下十八名なり

地方農林技師ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
長野縣農工技師 早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
長野縣農工技師 早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
長野縣農工技師 早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ任ス
早乙新一郎

地方農林技師ニ補ス
早乙新一郎

○田尻 恒治 (絲十七回) ○磯野 茂一 ○小川 春男 ○金子 新一郎 ○高橋 正高 ○高須 哲夫 ○宇根山 哲夫 ○安田 榮輝 ○小池 貞章 ○兄玉 徳弘 ○宮崎 美弘 ○湯淺 文雄 ○片倉 二郎 ○荒木 康男 (絲十八回) ○馬場 豊 ○根津 健 ○山田 保士 ○越英 信 ○鈴木 玄九 ○鈴木 保男 ○原井 慎蔵 ○荒木 慎蔵 ○井上 熊保 ○林 龜一 ○林 宇一 ○本間 茂鋭 ○大木 定雄 ○山口 伊祐 ○梅村 茂一 ○山崎 管録 ○宮原 秀人 ○鳥羽 誠 ○黒岩 京次郎 ○喜多尾 猪門 ○松崎 昇平 ○六川 忠行 ○長谷川 恒三 ○山本 金之助 ○小林 進 ○平野 正夫 ○松村 憲一 ○萱野 恒 (絲十九回) ○石井 公男 ○太田 良信 ○神崎 碩夫 ○鷹野 誠一 ○永島 覺 ○柳澤 榮一 ○山崎 通雄 ○山下 紀男 ○松本 清志 ○高馬 一太郎 ○望月 太一 ○矢島 隆之助 ○宮野 保夫 ○長谷川 弘平 ○宮崎 連 ○馬場 武 ○大平 正三 ○成尾 喜八郎 ○松井 憲二 ○徳永 忠祥 ○張 復昇 ○福島 喜蔵 ○井上 壯平 ○林 秀門 ○西 省 ○本 多 ○小澤 正一 ○吉川 知則 ○山崎 保太 ○宮下 幸三 ○加來 芳文 ○矢島 文男 ○宮下文四郎 ○依田 實 ○藤森 明義 ○竹内 正司 ○石井 清六 ○牧 道男 ○丸山 勳 (絲二十回) ○河西 省一 ○清水 良互 ○林 太郎 ○櫻井 隆夫 ○島倉 惣次郎 ○大橋 常次郎 ○椎屋 藤良 ○小原 基 ○北原 基 ○竹内 方榮 ○竹内 方榮 ○松崎 武雄 ○保々 鐵三 ○宮下 和三郎 ○近藤 茂信 ○村島 徹 ○佐藤 一 ○宮本 靜雄 ○西村 武男 ○宮下 丈夫 ○今村 與志郎 ○藤居 義明 ○安井 健一 ○坂本 政雄 ○高坂 嚴保 ○北村 育猷 ○石田 次郎 ○坂 求 ○柳澤 信義 ○武井 一郎 ○近藤 清一 ○鈴木 力

正誤

先月號に報告した千曲會通常會費納入者氏名の内左記二名は印は○印の誤でした此處に訂正いたします

千曲會規則第九條 第三項に依る第一回通常會費納入者

養蠶科

(絲一) ○野澤 泰治 ○松村 季美 ○湯川 秋夫 ○高須 兵司 ○丸山 俊一郎 ○佐谷 健次郎 ○坂田 榮雄 ○須田 圭二 ○小林 國造 ○須田 圭二 ○黒江 文雄 ○福田 鏡之助 ○齋藤 格次 ○中澤 勝也 ○小 林 庸 ○寺島 親雄

製絲科

○久保田 正樹 ○林 周蔵 ○鈴木 誠一 ○小林 茂樹 ○土岐 宣治 ○田中 一男 ○遠藤 文平 ○田中 三郎 ○酒井 五十三 ○大箸 政平 ○佐々木 峰二 ○湯淺 長輝 ○神保 喜久

千曲會規則第九條 第三項に依る未納會費納入者

養蠶科

(絲一) ○菅原 勇治 ○花岡 作彌 ○本間 直人 ○湯川 秀夫 ○波多野 千里 ○原田 兵衛 ○折茂 正太郎 ○藤勝 四郎 ○山本 辰五郎 ○玉木 勝彰 ○朝長 勝治 ○藤原 卓之 ○大石 卓壽 ○北村 一郎 ○廣濱 清四郎 ○濱井 壽夫 ○青木 針三郎 ○芝 荒雄 ○安孫子 文彌 ○小見 益男 ○富澤 政治 ○峰村 眞一郎

製絲科

(絲一) ○高田 茂重郎 ○伊藤 柳作 ○川合 軍之助 ○三輪 輔 ○森川 淳太郎 ○林部 源三郎 ○細川 三郎 ○塚田 眞喜雄 ○矢田部 忠吉 ○塚田 眞磨 ○山本 薫 ○永井 榮 ○甲斐 肇 ○見玉 忠雄 ○岸 益吉 ○見波 忍 ○中川 照 ○上野 榮仁

終身會費納入者

千曲會規則第九條第一項に依る終身

會費完納者

竹内 虎夫 (蠶九) 中津 信一郎 (絲十二) 笠原 義人 (絲十八) 同第九條第二項に依る終身會費完納者

入會金納入者

入會金貳拾圓完納者

(絲二十回) 市川 信一郎 駒井 慶治 町田 史郎 宮入 保己 森川 博 山崎 勝己 渡邊 正男

(絲二十回)

萩原 行雄 竹内 正司 松村 惠一 室岡 茂克 矢島 文男 川村 五郎

(蠶二十回)

新井 貞雄 有我 彰夫 北澤 延榮 倉元 隆太 都築 清治 福地 進 宮川 千三郎 矢野 宗彦 吉田 太郎

(糸二十回)

喜多尾 猪門 石井 清六 平野 正夫 藤森 明美 松崎 昇平 宮下文四郎 山本 金之助 六川 忠行 内金五圓納入者

(蠶二十回)

遠山 正人 萱野 恒 小林 進 山丸 勳 田上 忠義

弔慰金募集

本會々員渡邊隆平氏(絲九)豫而御病氣の處養生不相叶六月十九日遂に御逝去被致候間此段本紙上を以て及御通知候也追而有志弔慰金は來る八月末日迄に取纏め遺族へ贈呈可致候間便宜上振替口座東京第四三三四一番へ渡邊氏弔慰金の旨御明記の上御拂込被下度候 昭和八年八月十五日 上田蠶絲專門學校 千曲會

編輯室より

千曲會々員名簿は千曲時報の臨時發行として目下印刷中でありますが遅くも今月中には各自の御手元に御届け致します。 前月號から千曲會の會費納入者氏名を發表して居りますが會計の方は中々複雑して居り前月號にも申上げた通り数多い事ですから中には間違が無くとも限りません若し誤がありましたら次號に於て訂正いたしますから早速御申下下さい。 次に電報略語につき御注意申し上げます、今迄本部からの電報等に略語を使つた場合往々それが略語である事に氣付かず其の意味が先方に通じなかつた爲非常に不都合を來した事があります、今後は左様な事の無い様本部に於てはなるべく略語を使ひますから各自に於ても有効に之を使はれる様御すゝめ致します、尙略語表は千曲會員名簿にありまます。 殘暑の候而も氣候變調の折柄一層御自愛御奮闘の程を祈ります。